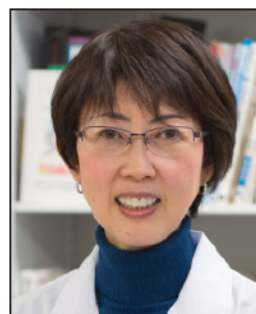


親が子どもを虐待する社会のシステムを変える

子どもへの虐待のニュースを耳にすることは少なくありません。虐待された子どもの脳の変化や治療について話をうかがいました。



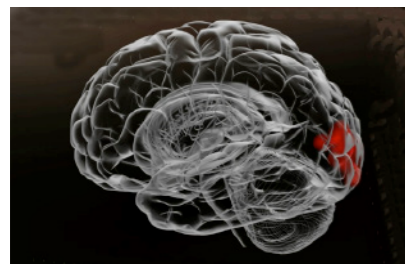
友田明美 (ともだ・あけみ)

医学博士。熊本大学医学部医学研究科修了(1987年)。2003年～2005年までマサチューセッツ州マククリーン病院発達生物学的精神科学研究プログラムに留学、ハーバード大学医学部精神科学教室客員助教授。2009年より日米科学技術協力事業「脳研究」分野グループ共同研究日本側代表者。熊本大学大学院小児発達社会学分野准教授、同小児発達社会学分野准教授を経て、2011年6月より、福井大学大学院医学系研究科附属子どものこころの発達研究センター教授、福井大学医学部附属病院子どものこころ診療部副部長を兼任。

虐待のタイプによって、脳は傷つく部分が違う

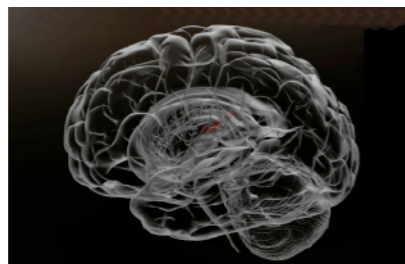
これまで私たちは、子どもの頃に受けた虐待や体罰によって、脳が影響を受けるのではないかと推測していました。けれども、脳を生きたまま見るのは不可能だった。開かずの扉だったんです。時代が進み、技術が飛躍的に伸びたことで、その扉が少しだけ開けられた。私たちの研究によって、虐待が脳を傷つけること、さらに虐待のタイプによって、脳は傷つく部分が違うことが明らかになりました。

子ども時代に「性的虐待」を受けた人は「視覚」をつかさどる脳の容積が減少。「暴言による虐待」は、「聴覚」をつかさどる脳の容積が異常に。「強い体罰による虐待」は、「感情・理性」をつかさどる脳の容積が減少。



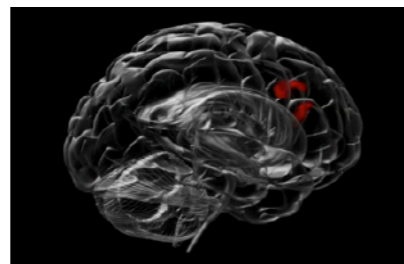
「性的虐待」の脳への影響
→「視覚」をつかさどる脳の容積が減少

子ども時代に性的虐待を受けた女子大学生23名と、虐待歴のない女子大学生14名とで比較したところ、虐待されていた女子大学生は、「視覚」をつかさどる脳の容積が18.1%も減少していることがわかりました。さらにこの研究では、虐待を受けた期間が長ければ長いほど、脳の容積が小さくなっていることも判明しています。



「暴言による虐待」の脳への影響
→「聴覚」をつかさどる脳の容積が異常に

子ども時代に暴言虐待を受けた男女21名と、虐待歴がない19名とで比較したところ、虐待を受けていた人は、「聴覚」をつかさどる脳の容積が異常であることがわかりました。これは、コミュニケーションにとって非常に大事な場所。当然、脳の中の色々なネットワークとつながっています。友田さんは「暴言虐待による脳の傷は、無視できないほど大きい」と話します。



「強い体罰による虐待」の脳への影響
→「感情・理性」をつかさどる脳の容積が減少

子ども時代に長期間、継続的に過度な体罰を受けた男女23名と、体罰を受けずに育った22名とで比較したところ、体罰を受けていた人は「感情・理性」をつかさどる脳の容積が19.1%も減少していることがわかりました。この部分が萎縮すると「抑うつ状態」や「行為障害」などの精神的なトラブルを引き起こすと友田さん。



さらに最近の研究では、両親のDV(家庭内暴力)を目撃した子どもも、「視覚」をつかさどる脳の容積が減少していることが明らかになってきました。

脳は意思を反映できない。だからこれらの脳の変化は、苦痛や恐怖が日常的にあるという、自分の置かれた過酷な環境でも生き残れるように脳を「適応」させてきたという悲しい結果なんです。

虐待がうつ病の発症に

虐待を受け、脳を傷つけられた人々には、さまざまな発達のひずみやゆがみが出てきます。

以前、6都道府県の16の児童養護施設で暮らす子どもたち287人を「親がいない(死別、精神疾患など)子ども」、「反社会的行動を起こした親(アルコール、薬物依存など)」そして、「親から虐待を受けていた子ども」の3グループにわけて、どのグループがうつ病を発症するか解析しました。その結果、うつ病を発症するのは、親から虐待を受けていた子どもだけだということが分かったのです。

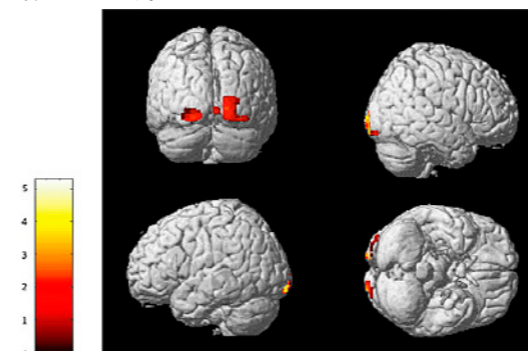
遊びを通して治療を行なうことも

まず重要なのは、できるだけ早く虐待の現場から助け出し、安心・安全を確保してあげること。その後、ドーパミンなど、神経伝達をスムーズにする「薬物療法」や心のケアをするなどさまざまな「心理療法」を行ないます。心理療法でよく行なわれるのは、子どもが虐待でのつらい体験を話し、その記憶や感情を整理し「自分が悪いわけではなかった」など客観的な記憶を持てるきっかけをつくってあげること。話ができない子どもには、遊戯(プレイ)療法といって、遊びを通して治療を行なう場合もあります。

他人が安心できる存在になる

「両親のDV(家庭内暴力)目撃」の脳への影響 →「視覚」をつかさどる脳の容積が減少

子ども時代に父親や母親が殴ったり、蹴ったりするDVを目撃していた22名と、DVのない家庭で育った30名とで比較したところ、目撃していた人は「視覚」をつかさどる脳の容積が20.5%も小さくなっていることがわかりました。これは、目から受ける情報を処理する部分で、損なわれると視覚的な記憶力や知能、学習能力にも影響が出ると言われています。



カラーバーは、T値を示しています。

「愛着(アタッチメント)」の治療も必要です。愛着とは親(扶養者)との交流によって形成される、精神的結びつきを表した言葉です。一般的な子どもは、親との交流で不安や恐怖がなだめられ、自然に親への愛情を形成していきます。けれど、虐待を受けている子どもは、苦痛を与える加害者を絶対的に正しいものだと思い込んだりすることで、意識的に歪んだ形での愛情を形成していく。さらに、これを他人にも適用するため、相手に対する不振や孤立などに繋がってしまうのです。

愛着に対する心理療法で一番大切なのは「周りにいる他人が安心できる存在だと思えること」です。支援者がきちんとした知識を持ち、彼らを受けとめる覚悟を持って接していく必要があります。

褒めることが自己肯定感を高める

虐待を受けていた子どもは、自己肯定感が低い。自己肯定感を高めてあげるには、褒めることが大切。実は褒められることによって、脳内で「報酬」として処理されるんです。つまり褒められるのは、お金をもらう気分と似ているということです。褒められることで、次も頑張ろうとする気が増し、次の学習にも繋がります。

傷ついた脳もケアで回復する

脳の傷は、決して治らない傷ではありません。脳の異常が治療によって改善されたという研究結果もあります。虐待によって発達が遅れていた9ヶ月の赤ちゃんを、虐待の現場から引き離したことで、停滞していた発達が戻ったという例もあります。もちろん、大人になっても脳は変わります。一度萎縮してしまった脳でも、回復する可能性は十分にあるのです。

虐待の連鎖を断ち切ること

一方、虐待を受けていた人は、自分の子どもにも虐待を行なう傾向が指摘されています。そういう人たちが、我が子に虐待を行なう確率は1/3。普段は平気でも、精神的ストレスが高まったときに虐待を行なう確率は1/3。合計すれば、虐待を受けていた人の2/3が、我が子を虐待していることになります。きちんとした治療を受けなければ、虐待の連鎖は断ち切れない。親が子どもを虐待する社会のシステムは、今、私たちが変えていかなければならないと思います。